

【選評】  
神奈川大学教授  
**大庭三枝**

## 東京・城南の町工場地帯から 近代日本の消長を捉え直す

本書はノンフィクション作家・写真家の星野博美氏が、自らのルーツである五反田界隈の戦前・戦後の姿を描いたエッセイ集である。

五反田は、東京・城南地区の中心地



### 世界は五反田から始まった

星野博美・著

ゲンロン / 2022年7月 / 1980円

の一つだが、副都心として知られる池袋、新宿、渋谷と比べるとややマイナーな街である。著者曰く、自分は戸越銀座の出身だが、それは五反田駅を中心とした「大五反田」の南端であるとい

う。戸越銀座は五反田を起点とする東急池上線で、五反田から三つ目の駅。「大五反田」とは、彼女が自分の「故郷域」を表現するために創出した概念であり、著者の祖父や父が人生を展開させてきた領域、そして著者が成長する過程で過ごした活動圏が収まる範囲を指す。具体的には南は国道二六号線、北は清正公前・覚林寺あたりとして、JR五反田駅を中心に同心円を描いた内側だという（三八頁）。

この「大五反田」の定義は著者の個人的な感覚によるものだが、不思議と牽強付会な感じはしない。なぜならこのエリアは、戦前日本の軍需産業を支える工業地帯として、さらに戦後も製造業で栄えた地帯という意味で、客観的にも一つに括れるからである。

#### 戦前の発展に重なる祖父の人生

過去と現代を何度も行き来しながら

ら「大五反田」を語る本書は、著者の祖父量太郎の人生を中心としたファミリー・ヒストリーを軸に、近代日本の製造業、特に戦前は軍需産業地帯として栄えた「大五反田」の発展と変貌、およびその街の人々のたどった軌跡について、さまざまな物語を描き出している。手がかりとなったのは、量太郎が晩年に病床で書き残した手記であり、加えて多くの既存研究や公開資料記録、証言集などが用いられている。

量太郎は千葉の外房の出身で、そのまま故郷にいても漁師になるしかなかったところ、東京の芝白金三光町で町工場を開いたばかりの遠縁の家で小僧として働くため、大正五（一九一六）年、一三歳で東京に出た。見ず知らずの人よりも地縁・血縁でつながる人を雇うのが常だったこの時代の、地方から都市へのヒトの移動の典型例である。

量太郎はその後独立して池田山の麓の低地地帯に金属加工を生業とする小工場を構え、それを最終的には戸越銀座に移転させた。この地を選んだのは、五反田あたりに彼のお得意様である大企業の工場があり、そこからほど近いところに居を構える必要があったからである。同様の下請工場が近辺にはひしめいており、第一次世界大戦による好況、工業ブームの中で、今の品川区を中心とする地帯（大五反田はその一角である）に、機械・金属・化学などの大小の工場が数多く創業し、日本の重化学工業化を後押しした。量太郎の人生は近代日本における製造業の発展とリンクしていたのである。

### 戦争における被害と加害の相克

本書の語り口の最大の特徴は、その時々々の国策やそれに規定された世の中の大きな流れの中で生きる庶民の苦難

に寄り添う姿勢と、彼らが客観的に観れば加害者の側面を持つことを冷静に観る目が同居していることである。

例えば著者は、第二次世界大戦末期の昭和二〇（一九四五）年五月二四日、連合軍による城南空襲によって、彼女の祖父の工場と自宅を含む「大五反田」はほぼ焼く野原になったことを語る。「大五反田」の人々は明らかに戦争の被害者である。しかし彼女は、話をそこで終わらせない。彼女は、戦前日本の軍需産業の発展を「大五反田」の工場地帯が支えていたと指摘し、だからこそこの人々は単なる被害者ではなく、国策の担い手であったこと、ゆえに加害者の側面を持つことを強調するのである。

犠牲者としての庶民という見方に引きずられそうになると、ぐぐつと襟元をつかまれ現実引き戻されるような感覚。第一三次満州興安東京荏原郷開

拓団についての箇所では、それをより強く感じた。これは、今でも日本最大のアーケード商店街として有名な武蔵小山商店街の人々によって組織された満蒙開拓団のことである。

戦前の武蔵小山は、大正一二（一九二三）年の関東大震災後、都心からの多くの移住者で人口が急増、目蒲電鉄（現在の東急目黒線）の武蔵小山駅を起点に発展を遂げ、「山の手五大繁華街」の一つとして栄えていた。しかし、昭和二三（一九三八）年の国家総動員法の施行によって食料や生活必需品が配給制となり、生活物資の製造・販売を生業とする武蔵小山商店街の人々の暮らしは立ち行かなくなつた。そうした状況の打開策として、商店街ぐるみで転業開拓団が組織され、昭和一八（一九四三）年一〇月から一九（一九四四）年六月にかけ、総勢一〇三九名が送り出されたという。

しかし、彼らを待っていた運命は悲惨であった。満州国を支配していた関東軍がソ連侵攻後に開拓団を見捨てていち早く撤退したことで、当時満州にいた民間人たちは地獄のような逃避行を余儀なくされ、多くが命を落としたことはつとに知られている。荏原郷開拓団も例外ではなく、彼らの多くが日本に戻れなかつたのである。

ここまでの話を聞くと、彼らに同情したくなる。しかし著者は、そうした感傷主義を許さない。生き残つた数少ない人々が書き残した記録を丹念に追ひ、彼らの実像を再構成しつつ、著者は彼ら開拓団が「侵略者」であり「加害者」であつたという、「どう転んでも言い逃れできない」事実を突きつける。一般の団員は「彼らを『人間の盾』としか思わない関東軍や、国策に阿る功名心や愛国心に煽られた浅はかな幹部たちの被害者」かもしれないと

がらも、彼らを「悲劇の人たち」として「絶対的被害者」のように受け止めることを拒否するのである（二四一頁）。

### 庶民の賢さ、したたかさ

もう一つ挙げておきたいのが、前述の城南空襲とその顛末についての話である。城南空襲が当時の品川区、荏原区をほぼ焼き払つたのは、東京の下町を中心の一〇数万人の死者を出した昭和二〇（一九四五）年三月の東京大空襲のほぼ二ヵ月後のことだつた。

驚くのは死者数の少なさである。単位面積あたりでは東京大空襲の二倍に当たる焼夷弾が投下されたのにもかかわらず、城南空襲の死者は二五二名だつたという。著者は当事者の多くの証言を紐解きつつ、三月の東京大空襲では、「非国民」と言われることを恐れるあまり、お国の方針に背いて消火

を放り出して逃げるわけにはいかなかった人が多かったことを、この地域の人々は学んでいたのだろうと推察する。城南空襲では「消火を諦めて逃げるといふ、本能として当たり前のことをして助かった人が多かった」。著者曰く「庶民の知恵のバトントッチ」がなされたのである。

経験値に根ざした庶民の賢さとはこういうことか、と安堵したのも束の間、当時混乱に乗じて巧妙に人の土地を乗っ取り、さらにそれを転売して大金をせしめた悪人が横行した話を読者は知ることになる。それゆえ、たとえ生き残ったとしても、戦後の混乱の中で、焼け野原になった自分の土地を他人に取られ、悔し涙に暮れる人も少なくなかったという。著者は体験者からの聞き取りも交え、混乱期における庶民のダークサイドにも光を当てている。

ちなみに著者の祖父は、空襲の当日

は疎開先である埼玉県の越ヶ谷にいたが、その後すぐに一人で家に帰って焼け野原に杭を打ち、土地を確保して、その後工場を再建することに成功した。著者は幼い頃から、もしまた家一帯が焼け野原になったら「戻りて、直ちに杭を打て」と何度も祖父から言い聞かされたという。

## 五反田の戦後製造業の盛衰の中で

著者の祖父の営んだ「星野製作所」はその息子、すなわち著者の父によって受け継がれ、右肩上がりの高度成長期にはジャグジーや消火用スプリンクラーなどの民生利用のさまざまな器具の部品を製造した。本書の底流には、その父の姿を見て育った著者の「製造業の子」としてのアイデンティティと矜持が流れていると感ずる。しかし日本の経済成長が鈍化していた平成九（一九九七）年、父は工場を閉じた。

その後も得意先の親工場と下請けとの仲介業として星野製作所は存続していたが、得意先の廃業を期に、ついに令和三（二〇二二）年三月、彼は完全に引退した。著者の家業の軌跡から、日本の製造業、そして工業地帯としての「大五反田」の盛衰が透けて見える。

著者は、「大五反田」から工場が姿を消し、再開発によってマンションが林立する街に大変貌を遂げるのを見て、自分が生き方を常に変えるように、街が時代に応じて変化するのは仕方がないという。自分という人間を形成した五反田は自分の心の中にある――。ファミリー・ヒストリーを軸とした「大五反田」を語りつつ、近代日本の製造業のたどった軌跡や、先の戦争と庶民との関わり、そして今まさに変わりゆく東京の姿を見つめる、著者独特の味わい深い語りは、ぜひ本書に当たっていただきたい。●